

## 第十六編 そして、船隊は、喜望峰をまわって

### (ヴァスコ＝ダ＝ガマと「インド航路発見」そのⅢ)

ヴァスコ＝ダ＝ガマ（1469－1524）の率いる4隻の船隊が、リスボンを出航したのは1497年7月8日（土）の事だった。船隊の構成は、進退に優れ、特に海岸近くでの航海には非常に適しているということで殆どが小型船（カラヴェル 又は、カラペラ船、軽快な帆船でアフリカ西海岸で活躍した）であった。4隻というのは、サン ガブリエル号120トン、ガマが指揮し、ペロ＝デ＝アレンクアーがパイロットを務めた。サン ラファエル号100トン、ヴァスコの弟パウロ＝ダ＝ベリオがキャプテンであった。もう一隻は、50トン船ベリオ号、ニコラス クエリョがキャプテンを務め、ペロ＝デ＝エスコバールがパイロットであった。最後の船は、200トンの供給船、コンカロ ヌネスがキャプテンであった。合計で160人の男達が乗り組み、水夫の他に兵隊も含まれていた。

リスボンを発って、この小さな船隊はカナリア群島からヴェルデ岬の群島にかけて頻々と停泊したあと、8月3日に勇躍発って、大胆に大西洋を大回りし、11月4日に南アのセント ヘレナ湾に達し、ついで11月22日に喜望峰に達した。岬を回り、船隊は3日後にサン ブラス湾に到着した。そこで供給船の乗組員を他の船に移動させて、船に火をかけた。12月6日に、探検隊が最初の石柱を残したのは、この場所であった。この石柱は、将来にむかって、ポルトガル人がこれらの土地を発見した最初の者たちだという事を示す為であった。つまり、土地に対するポルトガル王の立場を証拠付けるためであった。

サン ブラス湾を去って、ガマの船隊はアフリカの東海岸の探検に向かった。もし西海岸がポルトガルの水兵にとってさほど驚きではなかったとしても、東海岸はその比ではなかった。アフリカの東海岸地域は、インド洋に面しており、数世紀にわたって、アラビア、ペルシア、インド、そして、ある意味では、極東の人々の文化的、政治的かつ経済的な影響に晒されてきたのだ。加えて、この影響は、ある複雑且つ国際的な世界、ポルトガル人たちが驚かせるのに十分な世界を形成していた。この世界には、繁栄する港湾都市（交易港）が多数あり、それらは、スルタンの社会政治制度に従って組織され、かつ、ムスリムが圧倒的多数を占める都市人口を擁していた。

15世紀末にあつて、アフリカ東海岸で最も重要な港湾都市（交易港）は、ソファアラ、ケリマネ、モザンビケ、キルワ、ザンジバル、モンバサ、マリンデイなどであり、ダウ帆船が交易に使われていた。これらの交易港は、ジンヴァヴェエのような内陸の王国と東洋とを結びつけていた。これらスルタン領内の支配階級や商人達はアフリカ人であった。彼らの多くは、アラビア人、ペルシア人、あるいはインド人の背景をもった人々との混血であ

ったので、宗教的にイスラム教（ムスリム）であり、文化的にバンツー、アラビアン、ペルシアン、インディアンの影響に結びついた強烈な「根」を持っていた。これは言語、スワヒリにみる事ができる。スワヒリは構成的にはアフリカ語（バンツー語）だが、アラビア文字を使って書かれている。また、キルワの大寺院では、アラビアやインドの植民者や商人、それに顔に奇妙な儀式的な標（しるし）をつけたスワヒリ語を話すアフリカ人が、ともどもに、礼拝を行なっていたといわれている。

中国の「明」朝の成祖 永楽帝（在位1402－24）の時代に、対外積極策をとり、その一環としてイスラム教徒の宦官 鄭和（Chinese Admiral Zheng He 1371－1434頃）にしばしば大規模な南海遠征を行なわせた。遠征は永楽帝時代に6回、宣徳帝（在位1425－35）時代に1回で、都合7回に及び、鄭和が率いた大艦隊は東南アジアからインド洋・ペルシャ湾にいたり、一部はアフリカ東岸にまで達し、南海諸国の対「明」朝貢を盛んにしたとのことだ。鄭和自身はムスリムであったが、1405年から1433年の間7回に亘る遠征の結果、「インド洋世界はムスリムの圧倒的な勢力下にあるという結論」を報告している。この遠征が実施されてから約60年後の15世紀末にヴァスコ＝ダ＝ガマに率いられたポルトガル船隊がアフリカの東海岸に到達したことになるが、不思議な事に、ポルトガル人たちは、その同じ「結論」に達しなかった。代わりに、彼らは、この地域のどこかにキリスト教徒が住んでいる、しかも、ある者は商人であると自分たちに思い込ませていた。彼らは、モザンビケに着いて、そこから内陸に入ったところに、キリスト教国プレスタージョンの王国があると聞いて感激したらしい。マリンデイに着いてからも、「モザンビケで聞いた国は、半分ムーアで半分キリスト教徒であるらしい」と言い続けた程であった。

ヴァスコ＝ダ＝ガマの船隊とスワヒリ海岸との最初の出会いは、ソファアラ（現在のモザンビークの中部）やザンジバル（現在のタンザニア）のスルタン領であったが、通信、あるいは経済、政治、宗教の相違で決裂し、船隊は、モザンビーク島やザンジバル島（モンバサ島という説もある）から閉め出された。しかし、海岸沿いに更に北上すると、船隊はマリンデイのスルタン領に到達し、歓迎された。そこは多様な国家同士の競争に明け暮れていた地域であり、ポルトガル船隊の到着が、混沌とした状況に影響を与えうる機会と見られたのだ。

マリンデイの町は、小さな湾にあり、ビーチに沿って広がっていた。それはポルトガルのアルコチェテの町に似ていた。つまり、家々が背が高く、白亜であり、町の縁にそって内部に向いていた。パルムの森があり、周りの土地には、コーンや野菜が植えられていた。マリンデイは、ポルトガル人たちに、この国々を豊かにしている「商品」と「取引」について観察する機会を与えた。特に重要な事は、金、象牙、奴隷などの「商品」を、紅海や

ペルシャ湾やインド向けに輸出する「取引」を観察したことでであった。更に、マリンデイは、インド洋地域にあって、最初に、地方的権力によって署名された「平和と友好の条約」締結の舞台となった。

条約締結の時のヴァスコ＝ダ＝ガマの言葉を紹介しよう：

“おお！偉大なるマリンデイの王よ！！もしあなたの望みが、ポルトガルの王、わが神と共に、まるで真の兄弟の如く、平和と友好を築く事であるとすれば、あなたが今私どもに下賜された、かかる名誉は、今日以降、まるで私どもがあなたの家臣であるかのように、あなたに深い恩義を残すであります。”

そしてマリンデイの王が応えて曰く：

“神がお見通しの如く、私の心をもってかく書かれた、昼も夜もそして永遠に、私が今日以降、そして私の生涯にあって常に望んでいる事は、私の法によって今確かめられている様に、貴殿のポルトガルの王と真の兄弟の契りを結ぶ事だ。”

ポルトガル人達はマリンデイで最も重要な援助を手に入れた。つまり、アラビア人の水先案内人を得たことであった。この案内人が、ポルトガル人たちをアラビア海を横切って安全にインドの海岸に導いたのだ。この水先案内を務めたのが、アラビア人のイブン・マージドだったとある本にあった。その本によると、イブン・マージドという人物は、「海洋の書」や「インド・アラビアへの旅程書」などを著したインド洋航海の専門家であったらしい。つまり、ヨーロッパ人にとっての「新航路」は、アラビアの航海者の目からみれば、すでに体験と研究済みの安全な航路であった事になる。

大昔から、アラビア人は、インド洋上の航海を支配するモンスーンシステム（貿易風）の完全な知識を持っていた。アラビア人、それから、ペルシア人やトルコ人やムスリムのインド人にとっても、これは単なる航海術以上のもので、アラビア人が、インド洋地域での貿易取引の主導権をもつ所以であった。結果として、彼等の貿易のルートは、地中海のアレクサンドリアから中国の大きな港である広東や上海にまで拡大したのだ。

1498年5月18日に、ヴァスコ＝ダ＝ガマの船隊はインドの海岸を視界にいった。4日後、船隊はカリカットの沖に碇を下ろした。ポルトガル人たちが到着した頃のカリカットは、インドの港湾の中でも重要港湾の一つであり、優に最盛の、かつ南インドの海岸地区マラバールの国際取引の中心地であった。

カリカットは、胡椒、生姜や他のスパイスを輸出しており、その先は大洋を横切り、紅海に至り更に地中海に伸びていた。そこからはヴェニスやヨーロッパ諸国や巨大な中華帝

国（明帝国1368－1644）にさえ再配送していたのである。

ある記録に次のような下りがある：

“マラバールにポルトガル人が最初に現れたのは1498年であった。

彼らはインドのモンスーンシーズンの終わり頃に3隻の船でパンダラネにやってきた。そして、それから、カリカット港に陸路を辿った。彼らは数ヶ月そこに留まり、マラバールや現状に関する情報を収集し、貿易取引なしでポルトガルに戻っていった。マラバールへの彼らの訪問の裏に隠された意図は、胡椒を生産する国との取引を開始し、貿易を独占することだった。それ以前は、彼らは仲介者を通じてしか胡椒を買うことが出来なかったし、その仲介者も、マラバールからそれを輸入する者たちから胡椒を買っていたのだ。しかも間接的にであった。“

一連の政治的かつ宗教的な誤解がポルトガル人を含めて幾重にも重なった結果、ガマと彼の仲間がカリカットのヒンズー教の王とその従者をキリスト教徒と信じてしまった。彼らはヒンズー寺院を教会だと思った。恐らくビシュヌの配偶者であるラクシミーなどの女神を、聖母マリアと思い込んだし、ブラマン達を神父だと思った。ガネーシャなどのヒンズーの神々を教会の聖者だと信じたのだった。

その時の様子を記した同行の水夫の記録がある：

“ここカリカットで、インド人たちは、我々を大きな教会に連れて行ってくれた。教会の主殿は、修道院と同じ大きさであり、石造建築と彫刻とタイル敷きの道であった。主殿の中央には尖塔があり、人が一人くぐれる程度のドアがあり、そこから石の階段になっており、人が一人しかその階段を登れないようだった。ドアは金属で出来ており、その内側には小さな像があった。インド人たちは、その像を「我らの淑女 (Our Lady)」と呼んでいた。教会の主門の前には、壁沿いに7つの小さな鐘があった。

ここで、キャプテン（ヴァスコ＝ダ＝ガマ）は、祈りを捧げ、仲間たちはそれに唱和した。ブラマンたちは、彼らの左の肩の上から、右の肩の下にかけて布を下げていた。それはまるで神父のストールのようだった。ブラマンは、聖水を我々の頭上に注ぎ、この土地のキリスト教徒がしばしば額や、胸や、首の周りや肘から手首にまで塗るように白い塗料を塗りつけた。この全儀式はキャプテンの頭上で施された。彼らは白い粘土を塗りながら、キャプテンを褒め称え、その白い塗料を取らないように諭した。教会の壁には多数の聖者たちが描かれていた。聖者たちの頭上には後光がさして、それぞれ違った風に描かれていた。というのは聖者たちの歯は長く、約1インチほど口から突き出ており、夫々の聖者は腕が4－5本あった。“

ポルトガル人たちの最初の到着と接触の衝撃が薄らいだ後、その地方の支配者との友好な関係にも拘らず、複雑な問題が再び浮上し始めていた。この問題は、経済的な争点に加えて政治的且つ外交的な争点を含んでいた。ムスリム商人のコミュニティーに対する強力な影響が再び港の経済生活の中に映し出されたのだ。このコミュニティーは、インド土着のムスリムを含んでいた。ポルトガル人たちは、彼等をすぐに「ローカルムーア」と呼び始めた。しかし、外来のムスリム（商人）たちには、「メッカのムーア（Moors of Mecca）」という呼び名をつけた。

両方のグループの中で、特に第二のグループは、ヴァスコ＝ダ＝ガマとカリカットの王（ポルトガル人たちは、この王のことを、文学的に「海の王（King of the sea）」と呼んだ）との間の了解と合意を無視しようとした。「メッカのムーア」（ムスリム商人たち）は貿易でのポルトガル人との競争を「恐れ」ていたし、多分、新参のキリスト教徒に対する宗教的なライバル意識が、その「恐れ」を拡大していたのだろう。ポルトガル人たちの店で約8日間に亘り居座り、取引の代わりに、商品を破壊し尽くしたのだ。「ローカルムーア」（土着のムスリム）は、その店には決して来なかった。一般の人々も、1度は来ても、2度目は戻らなかった。両方のムーアグループは、次第にポルトガル人たちに対する憎しみを露骨にし始めた。ポルトガル人の誰かでも上陸しようものなら、むかむかした表情で大地に唾を吐き、「ポルトガルだ。ポルトガルだ。」と叫んだ。始めに、ポルトガル人を捕らえて殺そうとしたのは彼らだったのだ。

ヴァスコ＝ダ＝ガマや彼の仲間達は、カリカット上陸以来払拭できなかった異教徒たちとの相互の「無理解と誤解」に、更に、限られた情報や、理解には程遠いか、又は、勝手な解釈で故意に歪められた記事が加えられて、次第に追い詰められる事になった。

ガマは、カリカットを去る決断をした。

時に、カリカット到着から約3ヶ月後の事であった。

（第十七編に続く）

参考文献：

- ① National Museums of Kenya, Historical Monument “GEDI”に展示されているパネル類
- ② 世界の歴史8 「イスラム世界の興隆」 佐藤 次高 著